

## 構成的グループ・エンカウンターのプロセスに関する一研究 —自由記述データの計量テキスト分析による検討—<sup>1</sup>

水野 邦夫

### 問題

近年、心理教育の一手法として、学校などの教育現場にグループ・アプローチが数多く導入されている。なかでも、構成的グループ・エンカウンター(以後、SGEと略記)は最も普及している技法のひとつであろう。SGEについては國分(1981)を筆頭に、既に多くの文献等で紹介されている(SGEの詳細については、他に片野(2003)、國分(1992)、國分(2000)、國分・國分(2004)などを参照されたい)が、敢えて概要について説明すると、参加者が「エクササイズ」と呼ばれる他者とのふれあい(感情交流)を促進するためのコミュニケーション課題に参加し、それを通して感じたこと、気づいたことを自由に語り合い、互いの感情や認知を共有しあう(これを「シェアリング」という)ことで、自分への気づき、他者に対する気づきを得て自己発見・他者理解を深めていき、最終的には個人の心理的成長を促すことを目指すというものである。SGEは、エクササイズをはじめとして、ある程度決まった枠組み(この「枠組み」のゆえに「構成的」と呼ばれる)の中で行われるので、カウンセリングの専門家でなくても実施しやすく、また、参加者の人数が多くても対応が可能であることや、参加者の心理的安全性も確保しやすいことなどから、学校などの教育現場に取り入れやすかったと考えられる。ちなみに、文部科学省(2008)は、小学校の学級活動、児童会活動、クラブ活動において「人間関係を形成する力を養う活動などを充実すること」の一助として、「意図的にあるグループ作業を行わせ、ここで感じたことなどを率直に話し合うことにより人間関係を形成するために大切なことを理解させる手法(p. 117)」を取り上げることを例として挙げているが、SGEはこれに符合するものであろう。

教育現場に導入されたSGEについては多くの研究がなされ、児童・生徒・学生の心理的成長にプラスの効果をもたらすことが報告されてきた。近年(2013年以降)に発表された研究成果を概観すると、まず、櫻井(2013)は大学の授業でSGEを単発的に実施し、ポジティブな気分は上昇し、ネガティブな気分は低下したことを見出している。また、大場(2013)は教職課程の大学生の教職関連科目の授業にSGEを導入した結果、グループ内の人間関係が形成され、活動が活性化し、授業目標も達成されるなどの効果がみられたと述べている。さらに、吉田・岩瀬・福島・宇都宮・岡田(2013)は、管理栄養士を養成する大学に在籍する学生のコミュニケーション能力向上を目的に、授業でSGEを導入したところ、導入前後で能力が上昇するとともに、少なくともその効果が約3ヶ月は維持されたことを報告している。そして、

水野・嶋原・田積・新美・興津(2013)は、大学生を対象に合宿・自発参加型のSGEを実施し、全体を通して、感情変動が大きいほど他者への信頼感やSGE個人・グループ過程が肯定的に変化したことなどを明らかにしている。その他にも、四辻・水野(2014)は小学6年生を対象にSGEなどを導入し、それによってスクール・モラル(学級や学業に対する肯定的姿勢)が高まったことを見出し、境(2014)は日本語教育の授業にSGEを導入することで学習者の不安や抵抗感を低下させ、話す力を向上させる可能性があることや、自己理解や認知の修正・拡大につながり、コミュニケーション能力の養成にも効果を期待しうることを報告している。

ところで、上記の研究をはじめ、SGEに関する研究はいわゆる効果研究に属するものが非常に多いようであるが、単に効果だけをみるのであれば、SGE以外の技法でも同様の効果が得られるのではないかと思われる。現に、四辻・水野(2014)はSGEとともにソーシャルスキルトレーニング(以後、SSTと略記)の効果についても検討し、SSTにも同様の効果があることを見出している。そのように考えると、SGE研究も効果のみに注目するのではなく、体験過程(プロセス)に重点を置いた研究を行わなければ、他の技法との違いが明確にできず、水野(2014)が危惧するように、SGEも他の技法も結局は同じことをしているように受け取られかねない。それゆえ、SGE研究は今後さらにプロセス研究にも力を入れていくべきであろう。

SGEにおけるプロセス研究の必要性は、すでに野島(2000)によって指摘されているが、同時に、彼はプロセス研究には事例研究が欠かせないと述べている。たしかに、細やかなプロセスを把握するのに事例研究は優れているであろう。しかし、事例研究は研究者にある程度の心理臨床的熟練が求められるため、実施者がその方面の専門家でもない限り、簡単に取り組めるものではないであろう(先に述べたことと関連して、SGEは専門家ではない者が実施している場合が多いと考えられる)。また、事例研究には逸話的な内容が多く、信頼性や妥当性の確認された尺度を用いるなど、数量的データによる検討が行われていないという指摘(石川, 2014)があり、客観性において問題があることも否めないであろう。しかし、仮に尺度を用いてプロセスを検討したとしても、尺度研究で細やかなプロセスを拾うことができるのかという反論も出てこよう。このように、事例研究によるプロセスの検討にはそのきめ細やかさという利点とともに、技能的熟練や客観性に関する問題点も孕んでおり、事例研究を行うにはかなりのジレンマがあるといえよう。

そこで、多少なりともこのジレンマを解決する方法として、計量テキスト分析を活用した検討が考えられる。計量テキスト分析とは、インタビューデータなどの質的データ(文字データ)をコーディングによって数値化し、計量的分析手法を適用して、データを整理、分析、理解する方法のことである(秋庭・川端, 2004)。より具体的に言えば、文字データにおける単語の出現の有無や頻度、他の単語との共起関係(たとえば、単語Aと単語Bがさまざまな文章中にどの程度同時に出現するか)などの情報を数量的な値に置き換え、分析する手法である。この手法を用いることで、事例研究の持つ主観性のある程度解消することができ、尺度データでは測りたい細やかなプロセスもある程度明確にできることも考えられる。また、研究者の心理臨床的熟練が不十分であっても、この手法ならば、それを補うことも可能であろう。よって、プロセス研究にもこの手法を導入することで、今後の発展が期待できよう。

以上のことを踏まえ、本研究では計量テキスト分析の手法を用いて、SGE参加者のSGE体験プロセスを検討することを目的とする。具体的には、SGE参加者がSGEを体験してどのようなことを感じ、気づいたかを自由記述させ、その内容について計量テキスト分析を行い、参加者がSGEをどのように捉え、SGE体験にはどのようなプロセスがみられるかを検討する。

## 方法

### 参加者

20XX年から20XX+3年にかけて、近畿圏の一大学で心理学を専攻し、1年次前期必修の演習科目を受講した大学生464名(男子157名、女子307名。平均年齢18.61歳、 $SD=3.14$ 、ただし年齢に回答した423名分のみ)に対し、下記の内容のSGE体験への参加と質問紙調査への回答を求めた。

### プログラム

SGEの実施にあたりプログラムを作成した。プログラムは4セッションからなり、第1・2セッションは「自己開示と傾聴」を、第3・4セッションはさらに「価値観を聴き合う」・「自己主張」をそれぞれねらいとしたエクササイズとシェアリングで構成された。プログラムの詳細についてはTable 1を参照されたい。

### 質問紙

参加者がSGE体験をどのように感じたか、またどのように評価したかを調べるために、下記の項目や尺度からなる質問紙を用意した。

1)ふり返しシート 各週の授業のふり返りのために作成した。授業内容に関する4つの質問項目(今日の授業は楽しく参加できましたか、今日の授業はあなたのためになりましたか、他の人の意見や考えをじっくり聞くことができましたか、自分の意見や考えを他の人に伝えることができました

か)を5段階評定で回答する項目<sup>2</sup>と今日の授業で感じたこと、気のついたこと、学んだことを自由に記述させる項目からなる。

2)SGE体験評価尺度 水野(2013)が作成した尺度で、SGE体験を通して得られる個人の心理的成長感として、信頼感形成、自己発見、自己表出、他者受容、自己受容を測定する尺度(各5項目)と、ファイナー項目として違和感に関する5項目の計30項目からなる。各項目の評定段階は「非常にあてはまる(5)」から「全くあてはまらない(1)」までの5段階とした。なお、水野(2013)は因子分析による検討を通して、上記5尺度(信頼性形成～自己受容)の項目数をそれぞれ、6, 3, 3, 6, 6項目に再構成しており、本研究でもそれを用いた。

### 手続き

授業は毎週1回2コマ(1コマは90分)連続で行われ、複数名の教員が5つのテーマを各3回(3週連続)ずつ分担した。受講者は約20～25名程度からなるクラスに振り分けられ、クラス単位で各テーマを3週ずつ受講したが、そのうちのひとつがSGE体験を含むものであった。

SGE体験を含むテーマの授業は「コミュニケーションと心理測定」であると事前にシラバス等で告知した。授業担当者1名がリーダー役を務めたが、いずれのクラスも同一の者が務めた。

第1週目の授業の冒頭にオリエンテーションを行い、授業概要は、他者とのコミュニケーションを通して感情がどのように変化するかを主観的・客観的に検討するものであると説明し、さらに、受講者には参加・不参加の自由が認められていること(エクササイズなどに参加したくない場合は、無理に参加しなくてよい)、非審判的態度で臨むこと(他者や自分を批判しない)、授業中に知り得た個人情報に関しては守秘義務を履行することが授業の基本ルールであることを確認した。また、授業の効果や意義を測定するために、質問紙調査への協力を求めた。なお、協力に際しては、回答内容は研究目的のためのみに使用し、成績評価に加味したり個人情報把握に用いたりしないこと、個人のプライバシーに充分配慮すること、調査に協力したくない・できない場合は回答を拒否する権利を保障する(それによる不利益は一切生じない)ことを約束した。

オリエンテーションの後、質問紙への回答<sup>3</sup>を求め、回収後にアイスブレイキング(ショートエクササイズ)を10～20分程度行い、クラスをさらに小グループに分けて、引き続き第1セッションを実施した<sup>4</sup>。セッション終了後に質問紙への回答を求め、回収後に10分程度の休憩を取った。次の第2セッションは、第1セッションからメンバー替えをして実施した。終了後、質問紙への回答を求めた後、ふり返しシートを実施し、回収後に授業を終了した。

第2週目は、開始時に質問紙への回答を求め、回収後に前回に関しての簡単な振り返りをした後でアイスブレイ

Table 1 SGE体験プログラムについて

| 週            | セッション<br>番号 | ねらい                            | 概 要           | 備 考   |
|--------------|-------------|--------------------------------|---------------|---|
| 第<br>1<br>週  | 1           | ・自己開示と傾聴                       | インタビューa       | 原則2名1組で実施。<br>状況に応じて、実施後にショート<br>シェアリング等を行った場合あり。   |
|              |             |                                | 相方紹介a         | 先のペア(またはグループ)は崩<br>さずに、4~6名1組を作り、実施。<br>シェアリングはグループ内で行っ<br>た後、全体でも行なった(数名を<br>指名して発言させた)。 |
| 第<br>2<br>週  | 2           | ・自己開示と傾聴                       | スゴロクトーキングa, b | 原則6名1組で実施。<br>シェアリングはグループ内で行っ<br>た後、全体でも行なった(数名を<br>指名して発言させた)。                           |
|              |             |                                | シェアリング        |   |
| ふり返しシートへの記入  |             |                                |               |   |
| 第<br>2<br>週  | 3           | ・自己開示と傾聴<br>・価値観を聴き合う          | 二者択一a         | 原則6名1組で実施。<br>シェアリングはグループ内で行っ<br>た後、全体でも行なった(数名を<br>指名して発言させた)。                           |
|              |             |                                | シェアリング        |   |
| 第<br>2<br>週  | 4           | ・自己開示と傾聴<br>・価値観を聴き合う<br>・自己主張 | クルーザーc        | 原則6名1組で実施。<br>シェアリングはグループ内で行っ<br>た後、全体でも行なった(数名を<br>指名して発言させた)。                           |
|              |             |                                | シェアリング        |   |
| ふり返しシートへの記入  |             |                                |               |   |
| 第<br>3<br>週  |             |                                | 2週間の振り返り      | 過去2回の授業について「よかつ<br>たと思うところ」、「改善した方がよ<br>いと思うところ」を自由記述。                                    |
|              |             |                                | SGE体験評価尺度の実施  |   |
| その他          |             |                                |               |   |
| レポート作成などの授業。 |             |                                |               |   |

註:各エクササイズの出典は以下のとおりである。  
a:國分・國分(2004), b:國分・正保(1999), c:星野(2003)

キングを行い、その後に第3セッションを実施し(ここでも新  
たなグルーピングをおこなった)、終了後に質問紙への回  
答を求め、回収後に休憩(時間は同上)を取った。次の第  
4セッションもメンバー替えを行ったうえで実施し、終了後に  
質問紙への回答を求めた後、ふり返しシートを実施し、回収  
後に授業を終了した。

第3週目は、授業開始時に前回2週の授業を振り返っ  
て、「よかったと思うところ」と「改善した方がよいと思うところ」  
を自由記述させ、回収後にSGE体験評価尺度への回答を  
求めた。なお、3週目はSGEを実施しなかった。

なお、ふり返しシートへの回答時間は、約5~10分程度、  
SGE体験評価尺度は約5分程度であった。

### 結果

得られたデータのうち、4つのセッションにすべて参加し、  
なおかつ、ふり返しシートおよびSGE体験評価尺度への記  
入漏れ(無回答を含む)のなかった381名(男子120名、女  
子261名)のデータを分析対象とした。

また、自由記述データについては、KH Coder(樋口、

2004, 2012, 2014) 2.beta.31dを用いて分析を行ったが、  
その際、回答者の各回答における表現の揺れ(漢字表記  
かひらがな表記か、方言・俚言の類、誤った文法・語法・表  
記、など)を可能な限り統一・修正し、適宜句読点を加筆し  
た。

### 各週における単語の延べ出現数

各週で抽出された語の種類(数)、延べ出現回数の平均  
およびSDは、第1週目は1,016, 8.35, 29.78, 第2週目は  
966, 8.40, 31.51であった<sup>5</sup>。各週の自由記述データにおけ  
る主要品詞の延べ出現数を算出した。主な単語の延べ出  
現数をTable 2に示す。

表より、第1週目、2週目とも、名詞では「人」、「自分」が、  
動詞では「思う」が共通して多く頻出していた。一方、第1週  
目では「話」、「コミュニケーション」、「話す」といったコミュニ  
ケーションに関する単語が多く出現しているのに対し、第2  
週目では「意見」、「価値観」、「考え方」、「考え」のような、考  
え方に関する単語や「違う」、「違い」、「それぞれ」のような多  
様性を表す単語が多く、さらに「主張」、「納得」など、第1週  
目ではほとんど見られなかった単語も多く出現した。さらに

Table 2 各週における主要品詞単語の延べ出現数

|       | 名詞<br>(25回以上出現) | 動詞<br>(20回以上出現) | 形容詞<br>(5回以上出現) | 形容動詞<br>(5回以上出現) | その他<br>(15回以上出現) |     |      |      |      |      |    |
|-------|-----------------|-----------------|-----------------|------------------|------------------|-----|------|------|------|------|----|
| 第1週目  | 人               | 329             | 思う              | 359              | 楽しい              | 213 | 大切   | 38   | あまり  | 58   |    |
|       | 自分              | 191             | 話す              | 241              | 難しい              | 57  | 苦手   | 32   | とても  | 56   |    |
|       | みんな             | 134             | 聞く              | 122              | 面白い              | 38  | いろいろ | 21   | いろんな | 51   |    |
|       | 話               | 129             | 知る              | 99               | 上手い              | 14  | 簡単   | 14   | 少し   | 48   |    |
|       | スゴロク            | 104             | 感じる             | 67               | 多い               | 12  | 普通   | 12   | もっと  | 47   |    |
|       | 相手              | 96              | 分かる             | 66               | 嬉しい              | 10  | 意外   | 11   | 普段   | 44   |    |
|       | コミュニケーション       | 91              | 違う              | 63               | 深い               | 9   | 好き   | 11   | 仲良く  | 30   |    |
|       | インタビュー          | 76              | 喋る              | 51               | 仲良い              | 7   | 楽    | 10   | やはり  | 29   |    |
|       | 授業              | 74              | 話せる             | 46               | 恥ずかしい            | 6   | 大事   | 10   | いろいろ | 27   |    |
|       | ゲーム             | 54              | 知れる             | 45               | 短い               | 5   | 自然   | 7    | たくさん | 21   |    |
|       | 緊張              | 54              | 考える             | 38               | 長い               | 5   | さまざま | 6    | それぞれ | 18   |    |
|       | 会話              | 52              | 聞ける             | 36               |                  |     | 大変   | 6    | 改めて  | 19   |    |
|       | 質問              | 52              | 伝える             | 33               |                  |     | 必要   | 6    | これから | 17   |    |
|       | 今日              | 46              | 居る              | 30               |                  |     | 得意   | 5    | 全然   | 16   |    |
|       | 最初              | 43              | 取る              | 29               |                  |     |      |      |      |      |    |
|       | 話題              | 42              | 言う              | 27               |                  |     |      |      |      |      |    |
|       | 意見              | 41              | 気づく             | 23               |                  |     |      |      |      |      |    |
|       | 考え              | 32              | 盛り上がる           | 21               |                  |     |      |      |      |      |    |
|       | 紹介              | 27              |                 |                  |                  |     |      |      |      |      |    |
|       | グループ            | 25              |                 |                  |                  |     |      |      |      |      |    |
|       | 子               | 25              |                 |                  |                  |     |      |      |      |      |    |
|       | 第2週目            | 意見              | 463             | 思う               | 341              | 難しい | 94   | 大切   | 57   | それぞれ | 74 |
|       |                 | 人               | 365             | 違う               | 213              | 楽しい | 80   | いろいろ | 29   | とても  | 58 |
|       |                 | 自分              | 305             | 聞く               | 164              | 面白い | 66   | さまざま | 16   | いろんな | 46 |
|       |                 | 価値観             | 163             | 考える              | 73               | 多い  | 34   | 大事   | 15   | やはり  | 38 |
| 考え方   |                 | 102             | 感じる             | 66               | 悪い               | 21  | 必要   | 13   | 少し   | 29   |    |
| 考え    |                 | 99              | 分かる             | 61               | 新しい              | 17  | 苦手   | 11   | あまり  | 26   |    |
| みんな   |                 | 98              | 言う              | 49               | 上手い              | 10  | 同じ   | 9    | 改めて  | 23   |    |
| クルーザー |                 | 73              | 持つ              | 40               | 深い               | 10  | 好き   | 8    | たくさん | 22   |    |
| 主張    |                 | 61              | 話す              | 37               | 嬉しい              | 9   | 不思議  | 7    | 全く   | 22   |    |
| 納得    |                 | 51              | 聞ける             | 32               | 大きい              | 7   | 簡単   | 6    | しっかり | 21   |    |
| 話     |                 | 50              | 変わる             | 32               | 正しい              | 5   | 当たり前 | 6    | もっと  | 20   |    |
| 他     |                 | 49              | 出る              | 31               |                  |     | 非常   | 6    | いろいろ | 17   |    |
| 授業    |                 | 47              | 居る              | 29               |                  |     | 嫌    | 5    | 一番   | 16   |    |
| 他人    |                 | 45              | 伝える             | 28               |                  |     | 重要   | 5    | 本当に  | 16   |    |
| 今日    |                 | 45              | 知る              | 27               |                  |     | 大変   | 5    |      |      |    |
| 相手    |                 | 44              | 話し合う            | 26               |                  |     |      |      |      |      |    |
| 自己    |                 | 41              | 気づく             | 22               |                  |     |      |      |      |      |    |
| 違い    |                 | 39              | 言える             | 22               |                  |     |      |      |      |      |    |
| グループ  |                 | 31              | 出す              | 22               |                  |     |      |      |      |      |    |
| 理由    |                 | 29              |                 |                  |                  |     |      |      |      |      |    |
| ジャンケン |                 | 25              |                 |                  |                  |     |      |      |      |      |    |

註1: 数値は延べ出現回数を表す。

註2: KH Coderでは、名詞とは別に「サ変動詞(サ変動詞の語幹となりうる名詞)」や「名詞C(漢字一文字だけの名詞)」といった分類があるが、本研究ではそれらはすべて名詞として分類した。

註3: KH Coderでは、分析にさほど重要にならない単語を除外しやすくするなどの目的から、名詞、動詞、形容詞、副詞については、ひらがなのみで表記されるものを別に分類する(例、名詞B)が、本研究では副詞以外は、それらの単語(例、できる、ある)は除外している。

註4: 単語の抽出に際し、KH Coderは必ずしもいわゆる学校文法の分類とは合致していない場合がある。ある品詞が別の品詞に分類された場合(たとえば、本来名詞であるものが副詞に分類)には、できる限り学校文法に即した分類を行った。また、同一語が別々の品詞に分類される場合もある(例、いろいろ)。

註5: 「いろんな」(連体詞)や「みんな」(代名詞)は通常、KH Coderでは抽出されないが、テキストを概観した際に、これらの語はかなりの頻度で見出されたことから、強制抽出した。

第1週目は、形容詞で「楽しい」が圧倒的に多かったのに対し、第2週目は「難しい」が第1位となり、「面白い」も増加している。そのほか、形容動詞では第2週目の方が「大切」の出現数が増加しているなどの違いもみられた。

次に、各週において高い確率で出現する(特徴的な)単語を調べるために、特徴語分析を行った。各週上位10位までの結果を表Table 3に表す。先と同様に、第1週目はコミュニケーションに関する単語が特徴的に出現しているが、第2週目は考え方や違いに関する単語が特徴的に出現しているのが分かる。また形容詞では、第1週目は「楽しい」が特徴的に出現しているのに対し、第2週目は「難しい」が特徴的に出現していた。

Table 3 各週における特徴語分析の結果

| 第1週目      |      | 第2週目 |      |
|-----------|------|------|------|
| 楽しい       | .386 | 意見   | .615 |
| 話す        | .359 | 人    | .400 |
| スゴロク      | .247 | 自分   | .389 |
| みんな       | .230 | 思う   | .363 |
| 話         | .222 | 違う   | .363 |
| コミュニケーション | .189 | 価値観  | .359 |
| 知る        | .183 | 聞く   | .290 |
| 相手        | .167 | 考え方  | .197 |
| インタビュー    | .155 | 考え   | .193 |
| 授業        | .146 | 難しい  | .181 |

註：値はJaccardの類似性測度を表す。

各週の捉えられ方について

次に、参加者が各週のSGEをどのように捉えていたかを調べるために、単語間の共起度(Jaccard係数)をもとに、多次元尺度法ならびに階層的クラスター分析を行った。なお、各単語の出現回数が多すぎれば、たいていの者が使用している語であり、また少なすぎれば、少数の者しか使用していない語であることになり、それらの語も含めて分析を行うことは、却って分析に支障を来す恐れがあると考えられる。そこで便宜上、出現回数が38回(有効回答者の約10%)から250回(同66%)の単語についてのみ分析を行った<sup>6</sup>。また、クラスター数については、解釈可能性を考慮し、第1週目は5クラスター、第2週目は6クラスターを求めた。各週の結果をFigure 1およびFigure 2に示す。まず、第1週目の結果から(Figure 1参照)、クラスター1は「インタビューすることの難しさ」、クラスター2は「話してみることの大切さ」、クラスター3は「多様な意見に触れる面白さ」、クラスター4は「話すことの楽しさ」、クラスター5は「理解と緊張」と解釈した。これらのことから、第1週目はやはり「コミュニケーション」が一貫したテーマになっているといえよう。また、各次元の解釈は困難であるが、左から右への対角線より上下でみると、右上はポジティブ性、左下はネガティブ性と考えることができ、第1週目のSGE体験は「コミュニケーションを取ることが楽しい・面白い・大切だ」というようなポジティブな

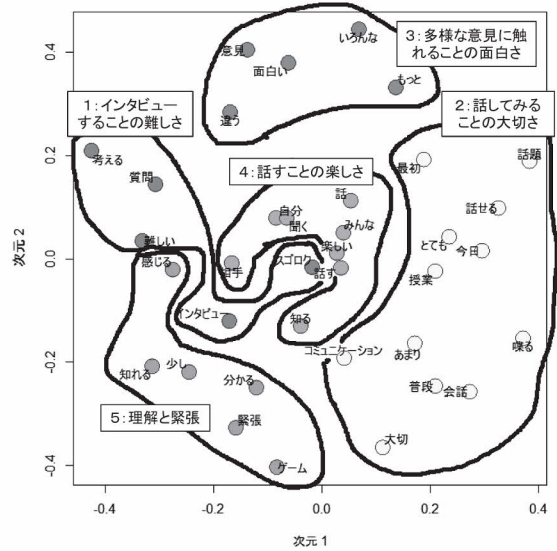


Figure 1 多次元尺度法の結果(第1週目)

ものとして認知される一方で、「コミュニケーションを取ることの難しさや緊張感」のようにネガティブにも捉えられる面があると考えられる。ただし、それらは必ずしも対極として捉えられているわけではなく、むしろ、両者は混在しているといえよう。

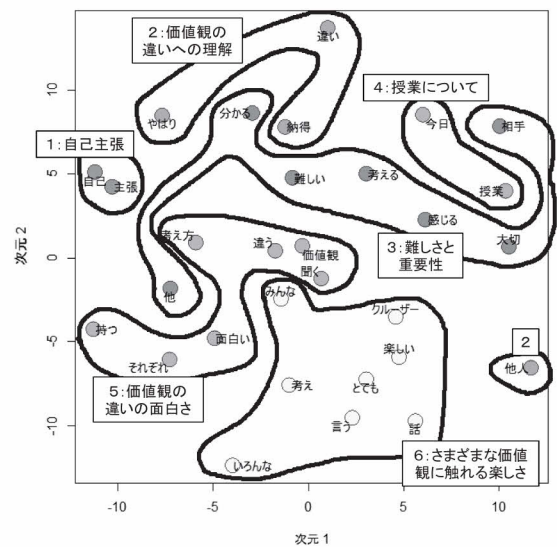


Figure 2 多次元尺度法の結果(第2週目)

第2週目は(Figure 2参照)、クラスター1は「自己主張」、クラスター2は「価値観の違いへの理解」、クラスター3は「難しさと重要性」、クラスター4は「授業について」、クラスター5は「価値観の違いの面白さ」、クラスター6は「さまざまな価値観に触れる楽しさ」と解釈した。これらのことから、第2週目は「異なる価値観の受容」が中心的なテーマとなっていると考えられる。また、第2週目も各次元の解釈は困難であり、第1週目よりもさらに、ポジティブ性とネガティブ性が混沌としているように見受けられる。

### SGE体験評価の程度による違い

次に、SGE体験後の個人の心理的成長感の高低により、SGEの捉え方がどのように異なるかについて検討を行った。各個人のSGE体験評価尺度総得点(計24項目、 $M = 87.25$ 、 $SD = 11.98$ 、 $a = .915$ )を算出し、分布状況をもとに、92点以上を評価高群(計120名)、82~91点を評価中群(計142名)、81点以下を評価低群(計119名)とした。各群において各週の特徴的な単語を調べるために、先と同じ単語について特徴語分析を行った。各週上位10位までの結果をTable 4に示す。また、各語と体験評価の高低との関係を調べるために、週ごとに対応分析も行った。その結果をFigure 3およびFigure 4に示す。

Table 4 SGE体験評価の程度による特徴語分析

|      | 低(N=119) | 中(N=142) | 高(N=120) |      |           |      |
|------|----------|----------|----------|------|-----------|------|
| 第1週目 | 授業       | .161     | 思う       | .296 | 楽しい       | .277 |
|      | 感じる      | .141     | 人        | .284 | 思う        | .276 |
|      | 緊張       | .130     | 話す       | .246 | 自分        | .255 |
|      | インタビュー   | .127     | 話        | .198 | 人         | .248 |
|      | 分かる      | .124     | スゴロク     | .186 | 話す        | .230 |
|      | ゲーム      | .123     | 相手       | .147 | みんな       | .227 |
|      | 難しい      | .119     | インタビュー   | .142 | 聞く        | .217 |
|      | 最初       | .110     | 違う       | .115 | 知る        | .190 |
|      | 話題       | .102     | 少し       | .102 | コミュニケーション | .183 |
|      | 今日       | .101     | 面白い      | .099 | スゴロク      | .163 |
| 第2週目 | それぞれ     | .161     | 思う       | .323 | 意見        | .301 |
|      | 難しい      | .159     | 人        | .302 | 自分        | .300 |
|      | 考え方      | .145     | 違う       | .262 | 人         | .274 |
|      | 楽しい      | .136     | 価値観      | .234 | 聞く        | .245 |
|      | 持つ       | .098     | 聞く       | .233 | 違う        | .226 |
|      | 他人       | .097     | 考え       | .195 | みんな       | .206 |
|      | 他        | .094     | みんな      | .189 | 面白い       | .166 |
|      | 出る       | .081     | 考える      | .150 | 考え方       | .164 |
|      | 変わる      | .079     | クルーザー    | .144 | 感じる       | .136 |
|      | 多い       | .079     | 話        | .136 | 大切        | .136 |

註: 数値はJaccardの類似性測度を表す。

図表をみると、第1週目は、評価高群は「話す」、「喋る」、「コミュニケーション」、「会話」、「聞く」のようなコミュニケーションに関する語が特徴的に現れ、また、「楽しい」も特徴的に現れており、他者とコミュニケーションをする楽しさを経験している様子が窺える。一方評価低群は、「緊張」や「難しい」といった語が特徴的で、エクササイズに対して困難さを感じている様子が窺える。一方、第2週目をみると、評価高群は「意見」、「違う」、「聞く」、「大切」などが特徴的であり、異なる考えを聴き、違いを感じることの重要を感じている様子が窺える。また、「楽しい」よりも「面白い」が特徴的に現れているのが第1週目とは異なっているといえよう。一方評価低群は、第1週目に引き続いて「難しい」が特徴的に現れており、ここでもエクササイズに対する困難さを感じているようである。しかし、「楽しい」も特徴的に現れており、困難さを感じつつもエクササイズを楽しんでいる様子も窺える。

### 考察

本研究は、構成的グループ・エンカウンター(SGE)の参

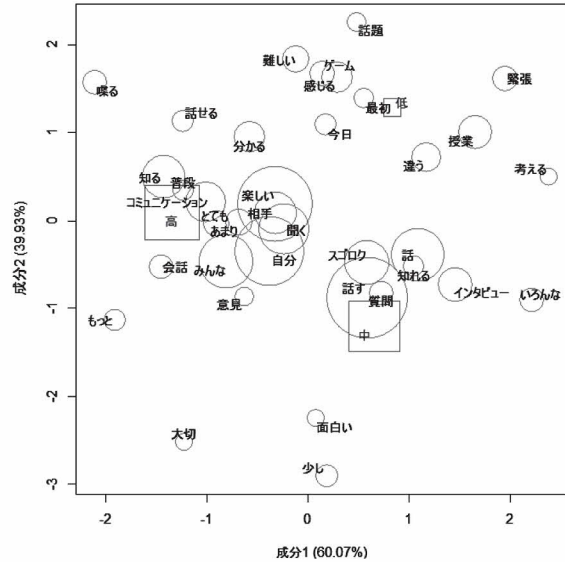


Figure 3 対応分析の結果(第1週目)

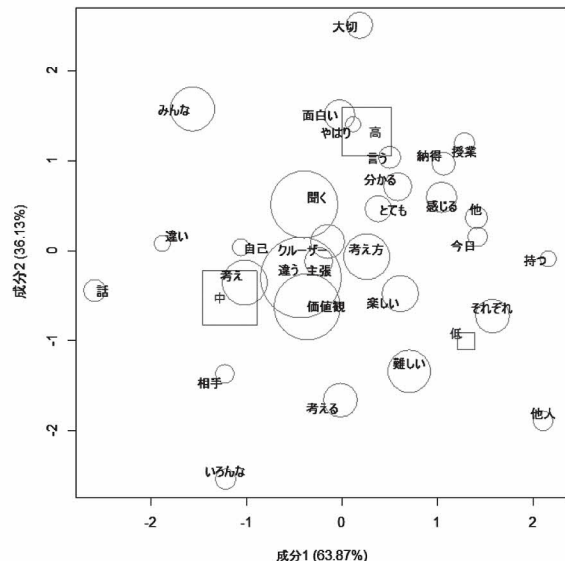


Figure 4 対応分析の結果(第2週目)

加者がSGEをどのように捉え、SGE体験にはどのようなプロセスがみられるかを、自由記述データをもとに、計量テキスト分析による検討を行うことを目的とした。

第1週目、2週目に頻出する単語の検討および特徴語分析を行ったところ、第1週目は「話す」、「聞く」などをはじめ、コミュニケーションに関する単語の出現頻度が高く、形容詞では「楽しい」という語が多く用いられたのに対し、第2週目は考え方や多様性、主張に関する単語の出現頻度が高く、形容詞では「楽しい」の頻度が下がるとともに「難しい」や「面白い」の頻度が上昇するなどの特徴がみられた。これらのことから、まず、参加者は各週のねらいに応じたSGE体験をしていたことが窺える。これは、インストラクションやエクササイズなどがねらいに即した内容になっており、参加者も各週のねらい(第1週目: 自己開示と傾聴, 第2週目: さらに、価値観を聴き合う・自己主張)を正しく理解していたこと

を表しているといえよう。SGEはややもすれば「エクササイズをこなすこと」に注意が向きすぎ、単なる「ゲームの場」に堕してしまふ恐れがある。しかし今回、参加者は総じてその恐れに陥ることなく、SGEはねらい通りに機能していたといえよう。

また、第1週目と2週目を比較すると、第1週目はSGE体験のなかでの他者とのふれあいを概ね「楽しい」と感じていたのに対し、第2週目になると、単に楽しいだけではなく、多様な感じ方が現れている。とくに「楽しい」が大きく減少し、「面白い」が増加した点に注目すると、中村・芳賀・森田(2005)は両者を類義語としつつも、前者は「心が満ち足りて浮き浮きする感じ(p. 408)」と定義しているのに対し、後者は「興味深く心が引かれる(p. 408)」と定義している。これは、前者が主に刺激に対する感情反応を表現しているのに対し、後者は認知的な働きまでも含んだ概念であることを表しているといえよう。そして、前者が減少し、後者が増加したということから、第2週目にはより深い心理的体験がなされている可能性が示唆される。また、第2週目には「大切」も増加しており、他者とのやりとりの重要性がより強く認識されるようになったと推察される。よって、第2週目の方が参加者の自己理解への深まりが増したと考えられ、参加者が第1週目から2週目にかけて、段階的に深い気づきへと変化するプロセスを辿っていることが考えられる。

次に、各週のSGEがどのように捉えられていたかをより詳しく検討するために、主要語について階層的クラスター分析および多次元尺度法を行った。その結果、エクササイズのねらいに即した理解がなされたと同時に、いずれの週もSGE体験をポジティブ、ネガティブの双方で捉えられることが見出された。ただし、その捉え方は対極化しているわけではなく、むしろアンビバレントに意識されていると考えられる。アンビバレントであることは、安定感を欠き、しばしば不適応に結びつきやすいと考えられるかもしれないが、むしろ不安定であるがゆえに、安定化するための洞察が行われ、それだけ自己理解の可能性が増すと考えることもできよう。また、このアンビバレントな傾向が第2週目にはさらに顕著になっていると考えられることから、セッションが進むにつれて、参加者が心理的洞察を深めることができた可能性が考えられよう。

つづいて、SGE体験の評価(SGEを通しての心理的成長感)による違いに注目し、特徴語分析および対応分析を行ったが、体験評価(心理的成長感)が高かった者と低かった者の間では違いがみられた。すなわち、評価高群は第1週目において、話すことの楽しさを感じるが、2週目には考え方の違いに対する面白さを感じるなど、感情が「楽しい」から「面白い」へシフトしている様子が窺えた。これらの形容詞の違いについては先にふれた通りであるが、SGE体験を通してさまざまな心理的成長をより強く感じた者(評価高群)は、SGE体験を単に「楽しい」とするだけではなく、

セッションの進行とともに、より深い体験として捉えることができたと考えられる。それに対し、評価低群はエクササイズに対する難しさなど、困難感が一貫して現れており、SGEに対して何らかの抵抗感がみられたと推察される。また、第2週目に「楽しい」が特徴的に見出されたが、第1週目にはそれほど特徴的な語ではなかったこと、逆に評価高群ではそれが第1週目に特徴的であったものの、第2週目はさほど特徴的でなかったことから、評価低群はエクササイズへの困難感に引きずられながら、高群のような深まりの進行が遅れている(第2週目になってようやく、「楽しい」という認識が増えたなど)可能性が考えられよう。

以上、計量テキスト分析を用いてSGEのプロセスを検討したが、今回報告したSGEは単発型(短期集中的にプログラムを実施するスタイル)でなおかつ研修型(授業の一環として行い、参加者は必ずしも自発参加ではないスタイル)であり、すべてのSGEが同様のプロセスを辿るわけではないであろう。しかし、他のスタイルによる実施の場合も、今回のように、計量テキスト分析を用いてプロセスを明確にすることが期待できよう。一方で、この分析は単語の出現頻度や単語間の共起性などをもとにしており、これらが心理的にどのような意味を有するのかについては議論の余地があるかもしれない。また、質的側面の高いデータを計量的に分析していることもあり、量的な質問紙研究と比べると、抽出された次元・軸やクラスターの解釈が困難であったり、半ば恣意的な判断になったりしている恐れも懸念される。しかし、自由記述データは、評定法などで得られたデータとは異なり、回答者の自由な考えを扱えるという点では優れていると言える。今後は量的データなどとの比較なども通して、結果の解釈の妥当性をいっそう高めていく必要がある。

## 文献

- 秋庭 裕・川端 亮 (2004). 霊能のリアリティへー社会学, 真如苑に入る 新曜社(樋口(2014)より引用)
- 樋口耕一 (2004). テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合— 理論と方法, **19**, 101-115.
- 樋口耕一 (2012). 社会調査における計量テキスト分析の手順と実際—アンケートの自由回答を中心に 石田基広・金明哲(編著) コーパスとテキストマイニング 共立出版 Pp. 119-128.
- 樋口耕一 (2014). 社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して ナカニシヤ出版
- 星野欣生 (2003). 人間関係づくりトレーニング 金子書房
- 石川信一 (2014). 心理トリートメント 実証に基づく心理トリートメント 岡市廣成・鈴木直人(監修) 青山謙二郎・神山貴弥・武藤 崇・畑 敏道(編) 心理学概論[第2版] ナカニシヤ出版 Pp. 299-306.
- 片野智治 (2003). 構成的グループ・エンカウンター 駿河台出版社
- 國分康孝 (1981). エンカウンター 心とこころのふれあい 誠信書房
- 國分康孝(編) (1992). 構成的グループ・エンカウンター 誠

- 信書房  
 國分康孝(編) (2000). 続 構成的グループ・エンカウンター  
 誠信書房  
 國分康孝・國分久子(総編集) (2004). 構成的グループ・エン  
 カウンター事典 図書文化社  
 國分康孝(監修) 正保春彦(編) (1999). 3分で見えるエクササイ  
 ズ×20例 エンカウンターCD-ROM 図書文化社  
 水野邦夫 (2013). 構成的グループ・エンカウンターにおける  
 体験の測定—SGE体験評価尺度作成の試み 帝塚山大  
 学心理学部紀要, **2**, 41-56.  
 水野邦夫 (2014). 構成的グループ・エンカウンターにおける  
 感情体験が人間的成長に及ぼす影響—継続・研修型の  
 問題点に対する改善のための提言を含めて— 帝塚山  
 大学心理学部紀要, **3**, 57-66.  
 水野邦夫・嶋原栄子・田積 徹・新美秀和・興津真理子  
 (2013). 合宿・自発参加型の構成的グループ・エンカウ  
 ンターにおける参加者の感情変動が自己および他者の捉  
 え方の変化に及ぼす影響—自他への信頼・不信および  
 個人・グループ過程の変化について— 心理臨床科学  
 (同志社大学心理臨床センター), **3**, 27-39.  
 文部科学省 (2008). 小学校学習指導要領解説 特別活動編  
 東洋館出版社  
 中村 明・芳賀 綏・森田良行 (2005). 三省堂類語新辞典  
 三省堂  
 野島一彦 (2000). 日本におけるエンカウンター・グループの  
 実践と研究の展開:1970—1999 九州大学心理学研究,  
**1**, 11-19.  
 大場浩正 (2013). 大学授業におけるグループ・アプローチの  
 教育的効果の検証 上越教育大学研究紀要, **32**, 239-  
 248.  
 境 智美 (2014). 日本語教育における構成的グループ・エン  
 カウンターの応用:ディスカッション「大学を10倍楽しくす  
 る方法」 山口国文, **37**, 66-78.  
 櫻井由美子 (2013). 単発型構成的グループ・エンカウンター  
 のエクササイズによる気分の変化 茨木キリスト教大学紀  
 要 II 社会・自然科学, **47**, 237-246.  
 吉田真知子・岩瀬靖彦・福島哲夫・宇都宮由佳・岡田 弘  
 (2013). SGEによる体験学習が管理栄養士として必要とさ  
 れるコミュニケーション能力の向上に与える影響 人間生  
 活文化研究(大妻女子大学人間生活文化研究所), **23**,  
 179-183.  
 四辻伸吾・水野治久 (2014). 児童の理想的学級像認知の視  
 点でとらえたSGEとSSTの効果 大阪教育大学紀要 第  
 IV部門, **62**, 131-141.

## 註

- <sup>1</sup> 本研究のデータの一部は日本教育カウンセリング学会第11  
 回研究発表大会(平成25年8月11日 於富山大学五福キャン  
 パス)において口頭発表された。  
<sup>2</sup> これらの項目については、回答の偏りが大きかったために、  
 本研究では分析対象から除外した。  
<sup>3</sup> ここで行われた質問紙調査は本研究の趣旨とは異なるため、  
 分析対象としていない。以後、特に調査内容にふれていない  
 ものも同様である。これらの調査が本研究で分析対象とした調  
 査への回答に影響したかどうかは明らかではないが、重大な  
 影響は及ぼしていないと思われる。

<sup>4</sup> 各セッションでシェアリングの終了後に、時間的余裕があつ  
 た場合や理解を促すのに必要であると判断した場合に、エク  
 ササイズやねらいについての補足説明(ショートレクチャー)を  
 行った場合がある。

<sup>5</sup> これらの中に、分析で全く使用しなかった品詞(助動詞、助  
 詞など)はカウントしていない。

<sup>6</sup> KH Coderで分類される「名詞B」、「動詞B」、「形容詞B」につ  
 いては、一般的で分析には使いにくい語が多い(樋口, 2014)  
 ことから、本研究ではそれらを除外して分析を行った(ただし、  
 副詞Bについては、残した方がよいと思われる単語がいくつか  
 みられたので、除外しなかった)。また、「否定助動詞」、「形容  
 詞(非自立)」も同様と判断し、これらも除外した。



**A study on processes in the structured group encounter :  
Examinations of free description data with quantitative text analyses.**

Kunio MIDZUNO

This study aimed to investigate participants' experience processes in the Structured Encounter Group (SGE) using quantitative text analyses. More than 400 fresh undergraduate students took a course for fresh persons and they participated in SGE which consisted of four sessions in the course: It took about 90 minutes for each session. The former two sessions (disclosing themselves and listening), across the break of about 10 minutes, were continuously performed and the latter (listening to others' values and asserting themselves) were also in the same manner in the next week. Participants were asked to describe freely what they had become aware of, felt and learned through their experiencing SGE at the end of the former and the latter sessions (i.e. they had two opportunities to describe). They were also asked to complete SGE Experience Evaluation Scale (Midzuno, 2013) in the following week. Quantitative text analyses with KH Coder (Higuchi, 2014 etc.) were performed to 381 (120 males and 261 females) valid free descriptions and scale data. Results revealed that 1) participants experienced SGE in accordance with the aim, 2) they had deeper psychological experiences in the second week (i.e. individual processes developed), 3) they felt both positive and negative to SGE experiences and these feelings were mixed (notably in the second week). Moreover it was shown that 4) participants who evaluated SGE experiences positively developed individual processes, whereas those who evaluated negatively struggled to SGE.

Keywords: Structured Group Encounter (SGE), studies of processes, quantitative text analyses